

令和4年度紀南地域高等学校活性化推進協議会のまとめ

令和5年2月

1 これまでの経緯

紀南地域の高等学校は、木本高校では平成6年度から総合学科が設置され、紀南高校では平成19年度からコミュニティ・スクールに指定されるなど、全国の先駆けとなる取組を進めてきました。一方、当地域では少子化などの社会の変化が激しく、生徒にとって魅力ある学習環境を整備するため、平成24年度から紀南地域高等学校活性化推進協議会を設置し、地域の県立高校のあり方や活性化の方策等について協議を続けてきました。

三重県教育委員会は、南部地域を中心に中学校卒業生数の減少が予測される中、平成29年3月策定の「県立高等学校活性化計画」（平成29～令和3年度）に基づき、1学年3学級以下の高等学校は、地域の状況、学校・学科の特色、生徒の通学実態等をふまえ、学校ごとに関係者による活性化協議会を設置し、学校と地域が役割を分担しながら「活性化プラン」を策定して活性化に取り組むこととしました。この地域においては、紀南高校で地域と一体となった活性化の取組を推進するとともに、こうした紀南高校の状況に加え、木本高校の活性化の取組状況等もあわせて当協議会で協議してきました。紀南高校をはじめ県内の小規模校では、これらの取組によって地域と連携した学びが進み、教育内容は充実してきましたが、多くの学校では入学者の増加には至っていない状況となり、計画の最終年度である令和3年度には、各学校の活性化協議会において小規模校活性化取組の総括的な検証を行いました。

こうしたことをふまえて策定した新たな「県立高等学校活性化計画」（令和4～8年度）に基づき、令和4年度の協議会では、6回の協議を重ね、15年先の当地域の中学校卒業生数の減少の状況も確認しながら、令和7年度に紀南地域の高等学校の1学年の総学級数が5学級程度になる際に想定される学びと配置のあり方についての方向性を取りまとめることとしました。

【参考】県立高等学校活性化計画（令和4年3月）より

「これからの時代に求められる学びを提供できる県立高等学校のあり方」

- ・これからの高等学校は、社会の変化をふまえ、持続可能な社会の創り手を育成することが求められており、そのため、豊かな社会性・人間性を身につけられる環境が一層重要となっている。
- ・3学級以下の小規模校活性化の検証結果、15年先までの中学校卒業生の減少の状況等をふまえると現行の高等学校の配置を継続していくのは難しい状況にあるため、各地域の高等学校の学びと配置のあり方について検討を進め、その中で1学年3学級以下の高等学校は統合についての協議も行う。これらのことについては、それぞれの地域の活性化協議会において具体的な内容を丁寧に協議する。
- ・こうした検討・協議は、統合という結論ありきで協議するのではなく、地域の実情に応じ丁寧に進めることとし、その際、状況に応じて、これまで取り組んできた、地域と連携した学びや学校独自の学びについての継承、交通が不便な地域における学びの機会の提供方策、分校化や校舎制への移行などについて協議することとする。
- ・次代の担い手となる三重の子どもたちがこれからも安心して学び、豊かな社会性・人間性が育まれる高校教育を進めていく。

○ 令和2～3年度の当協議会での主な意見

(地域の県立高校の現状等について)

- ・この地域の高校生は様々な職業に接することが少ない。職業が多様であるという情報が得られるような教育活動が推進されることが望ましい。
- ・地域に生徒を定着させるには、産学が連携して、これまでと異なる観点で子どもたちを育てていくべきである。
- ・2校では生徒減にともない存続が難しくなってきた部活動もある中、中学生が取り組みたい種目やレベルを求めて地域外へ進学する生徒も多いことから、両校で一体となった部活動を行ってはどうか。

(地域の高校のあり方を協議する場合に大切な考え方について)

- ・統合について協議する際には、法的、財政的な制約があると思うが、子どものことを一番に考えて議論してほしい。誰一人取り残さない教育をめざし、どの地域に生まれても子どもたちの学びを保障してほしい。
- ・子どもたちが自分の行きたいところで学べるようにしてほしい。また、保護者の意見も聞いてほしい。
- ・令和7年度の生徒減について協議しなければならないのも分かるが、御浜町や熊野市の昨年度の出生数は驚くほど少ない。15年先の少子化をふまえ学校のあり方を考えることによって、令和7年度のあり方の考え方も変わるのではないか。
- ・生徒や保護者のニーズに対応していくためには、この紀南地域の県立高校2校だけでなく、新宮市内の高校も含めて生徒に幅広い選択肢を提供する視点で考えてよいのではないか。

(紀南地域の県立高校のあり方について)

- ・地域では子育てしやすい環境が重要となるため、近くに通える高校があることが望ましい。他県の分校や校舎制等の事例も参考にしながら、この地域で2校舎を存続していく方策も検討できないか。
- ・2校のあり方については、想定されるいくつかのパターンを全体で共有し、ベターなものを検討していくしかない。
- ・両校のよいところを残しつつ、校内の選択肢を増やすために統合することは有りうるのではないか。
- ・将来2校の統合については仕方がないことと考えており、保護者の立場からは、子どもが十分に教育を受ける体制や学習環境を整備していくことが何よりも大切と考える。
- ・今後の地域の中学校卒業生の減少を考慮すれば、2校の統合もやむを得ないと考えるが、生徒のことを考えると、高校進学時に選択肢がある方が望ましい。
- ・紀南高校は、これまで地域と共に一生懸命活性化に取り組んできたこともあり、地域にとっても高校の存在は大きく、その存続を望んでいる。
- ・地域の衰退をとめるためにも学校は必要であり、子どもたちが紀南地域の高校を選択して、地域に残ることが地域の活性化にもつながると考える。

2 当地域の県立高校を取り巻く状況（令和4年度の協議会資料より）

（1）中学校卒業者数の推移と予測

三重県の中学校卒業者数は、令和4年3月には16,244人でしたが、令和13年3月には14,006人（令和4年3月比2,238人減）となることが見込まれており、引き続き少子化が進行します。少子化の進行状況は地域によって異なりますが、当地域において、中学校卒業者数は令和12年3月に過去最小の200人となるなど、以下のとおり減少することが予測されています。

令和4年3月 268人

令和7年3月 231人（令和4年3月比37人〔13.8%〕減）

令和12年3月 200人（令和4年3月比68人〔25.4%〕減）

令和13年3月 248人（令和4年3月比20人〔7.5%〕減）

また、地域の出生者数は、令和2年度に過去最小の155人となり、令和3年度は167人となっています。

このことから、当地域全体の県立高校（全日制）の1学年の学級数は、中学校卒業者の進路状況が現在と大きく変わらない場合、令和4年度の6学級から、令和3年度に生まれた子どもたちが高等学校に入学する令和19年度には3～4学級になることが予想されます。

	中学校卒業者数（予測）			R3年度出生者数	
	現高1 R4.3卒	現小1 R13.3卒	R4.3比較	現1歳 R19.3卒	R4.3比較
熊野市	119	98	▲ 21 (▲17.6%)	68	▲ 51 (▲42.9%)
南牟婁郡	149	150	1 (0.7%)	99	▲ 50 (▲33.6%)
合計	268	248	▲ 20 (▲ 7.5%)	167	▲ 101 (▲37.7%)
県全体	16,244	14,006	▲2,238 (▲13.8%)	11,589	▲4,655 (▲28.7%)

（2）木本、紀南両校の募集定員と入学者数の推移

紀南地域には、隣接する和歌山県新宮市に私立高校はあるものの、地域内に私立高校がなく、全日制高校への進学希望には県立高校のみが応えることとなります。そのため、当地域の全日制高校への進学見込み人数を超える人数の募集定員を設けています。このことは、地域の高校の募集定員が充足しない要因の一つとなっています。

		H30.4入学	H31.4入学	R2.4入学	R3.4入学	R4.4入学
木本高校	募集定員	200	200	160	160	160
	入学者数	190	200	158	160	159
紀南高校	募集定員	120	80	80	80	80
	入学者数	80	62	57	72	80
計	募集定員	320	280	240	240	240
	入学者数	270	262	215	232	239

(3) 紀南地域の中学校卒業者の木本、紀南両校への入学状況

紀南地域の中学校卒業者のうち、木本高校全日制または紀南高校へ進学する割合は80%を下回る状況が続いています。

一方、地域外の中学校を卒業して2校に入学する生徒は、毎年20名前後となっています。

	H30.3卒	H31.3卒	R2.3卒	R3.3卒	R4.3卒
紀南地域の中学校卒業生数	331	304	256	274	268
地域の中学校から2校への入学者の合計	251	240	195	210	211
地域卒業者に占める2校への入学者の割合	75.8%	78.9%	76.2%	76.6%	78.7%
【参考】地域外からの入学生数	19	22	20	22	28

(4) 紀南地域の中学校卒業者の木本、紀南両校以外への進学状況

紀南地域の中学校卒業者のうち、県内他地域や県外の全日制に進学する生徒の割合は20%前後ですが、減少傾向となっています。一方、定時制または通信制への進学や就職する生徒の割合は増加しており近年では5%を超える状況です。

なお、令和4年3月に中学校を卒業し、県内他地域または県外の全日制高校に進学した40名の生徒のうち、和歌山県の全日制高校へ入学した生徒数は19人です。地域外の全日制高校へ進学した理由は、部活動が20名、大学進学が10名、就職が7名、その他が3名となっています。

	H30.3卒	H31.3卒	R2.3卒	R3.3卒	R4.3卒	
紀南地域の中学校卒業生数	331	304	256	274	268	
県内他地域または 県外の全日制高校	入学生数	68	59	50	50	40
	割合	20.5%	19.4%	19.5%	18.2%	14.9%
定時制、通信制へ の進学、就職など	入学生数	11	5	11	14	17
	割合	3.3%	1.6%	4.3%	5.1%	6.3%

(5) 木本、紀南両校の卒業生の進路状況

平成30年3月から令和3年3月までの卒業生の状況は、4年制大学または短期大学へ4割弱、専修学校も含めると7割弱が進学し、就職は3割前後でしたが、令和4年3月の卒業生においては、進学者の割合が8割弱まで増加し、就職者の割合は2割弱まで減少しています。また、紀南地域の進路の特徴として、看護系大学・短期大学や看護専門学校への進学は約10%程度の状況が続いています。

	卒業 生数	進路先					看護系大学 短大 専門学校
		4年制大学	短期大学等	専修学校	就職	その他	
R4.3卒	250	93(37.2%)	24(9.6%)	76(30.4%)	46(18.4%)	11(4.4%)	32(12.8%)
R3.3卒	263	77(29.3%)	22(8.4%)	85(32.3%)	71(27.0%)	8(3.0%)	30(11.4%)
R2.3卒	283	84(29.7%)	26(9.2%)	80(28.3%)	82(29.0%)	11(3.9%)	28(9.9%)
H31.3卒	303	95(31.4%)	19(6.3%)	85(28.1%)	93(30.7%)	11(3.6%)	31(10.2%)
H30.3卒	281	92(32.7%)	16(5.7%)	80(28.5%)	82(29.2%)	11(3.9%)	33(11.7%)

(6) 木本、紀南両校の部活動の状況

部活動は生徒数に影響されるところが大きく、両校の全校生徒数が少なくなるにしたがって、部活動数や部員数が少なくなっています。

【木本高校】

	運動部数	運動部員数	文化部数	文化部員数	全校生徒数	全学級数
令和4年度	12部	220人	5部	140人	472人	12組
令和3年度	12部	243人	6部	169人	515人	13組
令和2年度	13部	226人	7部	168人	545人	14組
令和元年度	15部	264人	10部	199人	580人	15組

【紀南高校】

	運動部数	運動部員数	文化部数	文化部員数	全校生徒数	全学級数
令和4年度	7部	51人	9部	48人	196人	6組
令和3年度	7部	51人	9部	36人	176人	6組
令和2年度	8部	58人	10部	52人	193人	7組
令和元年度	9部	79人	10部	80人	236人	8組

(R4.5現在)

(7) 紀南地域における生徒の通学状況

木本・紀南の2校への通学状況は、県全体と比較すると、紀南地域の高校生の通学時間は短く、通学費用は比較的かからない状況となっていますが、1校に統合した場合にはこのことがどのように変化するのか、見定める必要があります。

【通学時間】

	15分以内	16～30分	31～45分	46～60分	61～90分	91～120分	121分以上	計
東紀州	273 (24.3%)	333 (29.6%)	282 (25.1%)	176 (15.7%)	54 (4.8%)	5 (0.4%)	1 (0.1%)	1,124 (100%)
県全体	4,309 (13.7%)	8,799 (27.9%)	7,283 (23.1%)	6,838 (21.7%)	3,551 (11.3%)	613 (1.9%)	110 (0.3%)	31,503 (100%)

【通学費用】

	不要	3,000円以内	5,000円以内	7,000円以内	9,000円以内	11,000円以内	13,000円以内	15,000円以内	15,001円以上	計
東紀州	546 (48.6%)	68 (6.0%)	222 (19.8%)	140 (12.5%)	73 (6.5%)	35 (3.1%)	17 (1.5%)	12 (1.1%)	11 (1.0%)	1,124 (100%)
県全体	13,448 (42.7%)	1,714 (5.4%)	6,320 (20.1%)	3,273 (10.4%)	1,991 (6.3%)	1,775 (5.6%)	1,285 (4.1%)	722 (2.3%)	975 (3.1%)	31,503 (100%)

(R4.5.1現在)

【参考】これまでの県立高校の統合、および全国の1学級規模の学校の状況

県内でこれまでに統合した5校のその当時の状況や、全国の1学級規模の本校・分校163校における活性化の取組状況や入学者数の状況を参考にしながら、紀南地域の5学級規模の学びについて協議しました。

3 令和4年度の協議内容と主な意見 ～令和7年度に想定される5学級規模の高等学校の学びについて～

(1) 5学級規模の具体的な配置や想定される状況について

5学級規模の配置として、5-0、4-1、3-2のパターンについて、第2回、第3回に協議を行いました。主な意見は以下のとおりです。

想定A 2校が統合して1つの校地で学ぶ(1校5学級規模)

○学びについて

- ・ 生徒の興味・関心に応じた学習を選択できることが見込まれる
- ・ より大きな学級規模となり、生徒の学習環境や授業内容が充実することが見込まれる

○部活動について

- ・ 地域からのニーズが高い部活動の維持につながり、社会性・人間性の育成に大きな効果が期待できる
- ・ 部活動の充実を求めて地域外へ進学する生徒もいるため、1校に統合して部活動を活発化し、ニーズに応えることが期待できる

○生徒の状況について

- ・ 大きな集団にすることでクラス替えもできることから、生徒は自分の居場所をつくることが期待できる
- ・ 紀南地域の中学校卒業者の8割を越える生徒が高校時代を一緒に過ごすことで、この地域の多様な価値観を持つ同年代の仲間とのつながりが広域で形成されることが期待される

○想定Aにおいて工夫すべき事項や課題

(学びについて)

- ・ 生徒一人ひとりに応じた丁寧な指導や支援を継続させていく工夫が必要
- ・ 地域の担い手を育む教育を進めるための工夫が必要
- ・ 学校の選択肢がなくなることで、生徒の学習に対するモチベーションが下がらないようにする工夫が必要

(通学について)

- ・ 現在より通学に時間のかかる生徒への支援の検討が必要

想定B 2校が連携して2つの校地で学ぶ(4学級+1学級)

○学びについて

- ・ 生徒一人ひとりに対応した少人数ならではの丁寧な指導が継続できる

○生徒の状況について

- ・ 2校舎が存続することで、生徒の通学環境は変わらない

○想定Bにおいて工夫すべき事項や課題

(学びについて)

- ・ 豊かな社会性・人間性の育成のために、地域と協働した教育活動の推進やICTの活用が必要
- ・ 学びをより充実するために、校舎制にして、授業では教員が、学校行事や部活動では生徒が、校舎間を移動するなどの検討が必要

(部活動について)

- ・ 人数が少ないことで活動に制限がかかることへの対応が必要

(教育環境の確保について)

- ・ 1学級規模の学校において大きく欠員を生じたときを想定した、教育環境の確保について検討が必要

想定C 2校が独立して2つの校地で学ぶ(1校3学級+1校2学級)

○生徒の状況について

- ・ 生徒の多様なニーズがある中、それぞれの校風を生かし、生徒は新たな人間関係をつくるなど、自分に合う学校選択ができる

○想定Cにおいて工夫すべき事項や課題

- ・ 学校を選ぶ選択肢はあるが、両校舎が小規模校化するため、それぞれの学校内での学びの選択肢が限られる。
- ・ それぞれの校舎で教員が減少し、子どもたちの多様な学びの保証や部活動の維持も難しくなり、教育環境の確保について検討が必要

※2校が連携する3学級規模の本校と2学級規模の分校とすること

保護者へのアンケート内容を検討する際、2校を3学級規模の本校と2学級規模の分校とし、連携しながら学ぶ方法が提案され、選択肢に入れることとなった。

(2) 「令和4年度紀南地域の県立高校に関するアンケート」結果について

地域の中学生及び保護者の意見を参考とするためにアンケートを行い、その結果をどのように捉え、どのように生かしていくかについて、第4回に協議を行いました。

アンケート結果について

調査期間：令和4年9月～令和4年10月14日
調査対象：中学2年生（262人）、中学1、2年生保護者（486人）
調査方法：中学生はC B T、保護者は紙
回答者数：中学生240人（91.6%）、保護者415人（85.4%）

○中学生アンケート結果

- ・高校を選ぶとき「進学や就職など多様な進路に応じた学習を選択できること」や「通学のしやすさ」、「多くの友達や先生との出会い」、「入りたい部活動があること」を重視している。
- ・高校では、「5教科などの中学校での学びを深める学習」をしたいと考えている。
- ・高校には、「自分の将来を選択する力」、「社会性や協調性、コミュニケーション能力」、「自ら学び続ける力」などを育む教育を期待している。
- ・「1～3学級」の学校で学びたいと考えており、その理由は学級規模を問わず、「友だちや先輩、先生など、多くの出会いがあると思うこと」としている。

○保護者アンケートの結果

- ・高校を選ぶとき「進学や就職など多様な進路に応じた学習の選択ができること」や「大学進学につながる学力向上を目指した学習ができること」を重視している。
- ・高校には、「社会性や協調性、コミュニケーション能力を育む教育」や、「進路選択の力を育む教育」、「主体的に学び続ける力を育む教育」、「社会人として必要なマナーや礼儀・責任感を身につけることができる教育」を期待している。
- ・令和7年度の地域の高校のあり方については、半数近くの保護者が「2校を統合した学校で学ぶ（1校5学級）」を選択する中、3分の1を超える保護者が「統合せずに、それぞれの学校で学ぶ（1校3学級＋1校2学級）」を選択している。

協議会の主な意見

- ・中学生は多様な進路に応じた学習や多くの人々との出会いを求めているのに、高校で学びたい学級数は1学級・2学級・3学級として小さい規模を選んでいる。このねじれた結果をしっかりと読み解く必要がある。
- ・この地域の中学校は人数の少ない学校が多いため、在籍する中学校をこえる大きな規模の学校をイメージしにくかったのではないだろうか。アンケート結果からは、現在在籍している中学校の学年の人数より、少し大きめの学級規模を選んでいることが読み取れる。

- ・独立か分校化かにかかわらず、2校舎の存続を望む意見をあわせるとほぼ半数となり、1校舎にすることに慎重な意見もあると感じた。
- ・校舎を1つにするか、2つ残すかは別として、5学級の学びを1校として統合することを望む意見が6割となるため、これからの協議に際し、柔軟な視点から検討していく必要がある。
- ・自分の人生の選択肢がきちんとある方が望ましいことを考えると、入学した学校に多様な選択肢があることがより大切ではないか。中学生や保護者のアンケート結果からも、「選択する力を育てる教育」を期待する割合が高く、就職や進学等の多様な進路に応じた学習を選択できることが強く求められている。
- ・アンケートは地域の声として重く受け止めなければならないが、この結果は令和7年度の高校のあり方をどのように考えるかという当事者の意見である。協議会としては令和7年度だけでなく、15年先をみすえた視点を大事にしながらアンケート結果を読み取り、議論を進めなければならない。

(3) これからの紀南地域の高等学校に求められる学びについて

これまでの協議やアンケート結果をふまえ、これからの紀南地域の高等学校に求められる学びを整理したうえ、令和7年度に想定される5学級規模の学びと配置について、第5回、第6回に協議を行いました。

紀南地域の高校がめざすべき教育や役割に係るこれまでの議論について

- ・ 学びの選択肢が充実し、生徒が自ら学びたいと思える学校
- ・ 生徒の進路実現に向け、大学進学や地元への就職にも対応できる学校
- ・ 様々な団体と連携する活動が充実し、全国に誇れる魅力ある教育活動を行う学校
 地域の産業や企業と連携した学び
 小中学校、大学等の地域の教育機関と連携した学び 等
- ・ 様々な支援が必要な生徒をはじめ、一人ひとりへの丁寧な指導により自己肯定感を高める学校
- ・ ICTを活用して地域外ともつながる学習活動が充実している学校
- ・ 学校行事や部活動が活発化している学校
- ・ 集団の中で多様な考えや価値観に触れながら、豊かな社会性、人間性を育む学校

中学生や保護者へのアンケート結果について

(中学生、保護者の少なくとも一方の割合が50%以上、またはあわせた割合が35%以上)

- ・ 進学や就職など多様な進路に応じた学習を選択できる教育
 中学生 73 人 (30.4%)、保護者 270 人 (65.1%) あわせて 343 人 (52.4%)
- ・ 自分の将来を選択する力を育てる教育
 中学生 135 人 (56.3%)、保護者 170 人 (41.0%) あわせて 305 人 (46.6%)
- ・ 社会性や協調性、コミュニケーション能力を育てる教育
 中学生 71 人 (29.6%)、保護者 176 人 (42.4%) あわせて 247 人 (37.7%)
- ・ 多くの人と出会うことを期待している
 中学生 138 人 (57.5%) ※保護者への質問事項はなし

(中学生、保護者の少なくとも一方の割合が40%以上50%未満、またはあわせた割合が25%以上35%未満)

- ・ 5教科など中学校で学習する内容を深める学習
 中学生 99 人 (41.3%) ※保護者への質問事項はなし
- ・ 自ら学び続ける力を育てる教育
 中学生 63 人 (26.3%)、保護者 158 人 (38.1%) あわせて 221 人 (33.7%)
- ・ 社会人として必要なマナーや礼儀・責任感を身につけることができる教育
 中学生 56 人 (23.3%)、保護者 114 人 (27.5%) あわせて 170 人 (26.0%)
- ・ 通学しやすい
 中学生 75 人 (31.3%)、保護者 94 人 (22.7%) あわせて 169 人 (25.8%)
- ・ 大学進学につながる学力向上を目指した学習
 中学生 51 人 (21.3%)、保護者 114 人 (27.5%) あわせて 165 人 (25.2%)

※中学生は240人、保護者は415人が回答していることから、あわせた割合は分母を655人として算出

● これからの紀南地域の高校に求められる学びについて

- ・ **多様な進路に応じた学びの選択肢が充実し、生徒が主体的に学べる学校**
- ・ **校内外の生徒や社会とのつながりの中で、社会性や協調性、コミュニケーション力を育む学校**
- ・ **学校行事や部活動が充実し、生徒が活発に活動できる学校**
- ・ **多様な生徒1人ひとりに丁寧に対応したきめ細かな指導が充実している学校**

5 学級規模における学びと配置のあり方について、

「4学級＋1学級の校舎制」に対する主な意見

- ・両校のよさの継承、通学への配慮、学校運営などを考えると統廃合はいたしかたなく、「4学級＋1学級の校舎制」がベストではないか。両校舎の総合学科の学びに独自性を持たせ、子どもたちがその学びを選択できるようになるとよい。
- ・木本高校と紀南高校のどちらか一方に統合するのは、その位置関係上偏りがあるため難しく、また、校舎制であっても紀南校舎が1学級となることには抵抗があるため、3学級と2学級の独立校として存続してもらいたい。
- ・大学進学に向けた学びの多様性に応える必要があることと、それぞれの高校の学びを継続していくことの両立を考えると、「4学級＋1学級の校舎制」がより多くの人々が納得できる配置である。独立した3学級と2学級の高校とすると、双方の魅力が低下してしまう恐れがある。
- ・子どもたちの学校生活の充実を一番に考えてほしい。そのためには1校に統合して人数の多い方がよいと思うが、経済的な事情への配慮や多くの選択肢の提供という点では、校舎制が妥当ではないか。
- ・紀南校舎1学級の学びの内容は今後の検討課題とされているが、本当にうまくいくのか疑問が残る。統合はやむなしだが、4学級と1学級とすることには反対である。
- ・「4学級＋1学級の校舎制」は、これまで協議してきたことやアンケートの結果をふまえた案だとは理解できるが、賛成も納得もできない。
- ・今後の少子化の進行を考えると本来1校5学級に統合するべきであるが、これまでの協議をふまえると「4学級＋1学級の校舎制」を認めざるを得ない。来年度からの具体的検討の内容については、その経過を適宜報告してもらい、我々地元の声も取り入れて欲しい。
- ・「4学級＋1学級の校舎制」について、木本校舎で大学進学に向けて必要な普通科3学級は確保されているものの、1学級の紀南校舎で様々な学びや生徒の進路をどれだけ保証できるのか不安な要素は残るため、今後も検討を重ねていく必要がある。
- ・今後の中学生の減を考えると1校舎への統合がよいという意見が同窓会では多かったが、校舎制での先生や生徒の交流、部活動の工夫によって、今までにない学びをもつ高校としていきたい。
- ・この協議会ではこれまで長い間両校の統合は避けられないとしながらも、結論を先送りしてきた。今後は、生徒が学びたい学校となるよう、子どもたちの目線でニーズをしっかりとふまえた学びを考え、地域の子どもたちを地域で育てられる高校をつくってもらいたい。
- ・協議会では様々な意見があったが、概ね「4学級＋1学級の校舎制」を支持する意見が多かった。今後は子どもたちの豊かな未来を実現していくために、紀南地域が一体となってこれからの子どもたちの学びを支えて欲しい。

4 令和7年度の5学級規模における学びと配置のあり方について

- ・ 中学校卒業生数が減少していく中であっても、地域の様々な分野で活躍できる人材を育成する視点を大切にして、大学進学や就職などの進路希望の実現につながる学びとともに、多様な生徒に応じて地域と連携したきめ細かな学びを提供する。
- ・ 多様な学びの選択肢の提供や豊かな社会性・人間性の育成、学校行事や部活動の充実のためには、一定の学級規模や学校運営の工夫が必要である。
- ・ 地域と連携したきめ細かな学びについては、木本高校及び紀南高校それぞれで先駆的に取り組んできた活動を継承する。
- ・ 令和7年度に地域全体で1学年の総学級数が5学級となる中、こうした学びを実現するためには、2校を一体的に運営するとともに、これまでのきめ細かな学びを継続できる高校としていく必要がある。
- ・ 以上のことから、木本高校と紀南高校は一つの高校に統合し、それぞれの校舎を活用した校舎制とすることとする。学科については、普通科3学級を木本校舎に配置し、総合学科1学級を木本校舎及び紀南校舎にそれぞれ配置する。
- ・ 今後、各校舎で学習することを基本としつつ、両校舎が一体となった活動や連携した授業も行うこと、学校行事や部活動がより魅力的で少しでも多様な活動となるようにすること、教員や生徒が必要に応じて両校舎間を行き来すること、教職員が校舎・学科・課程の枠を越えて連携することなどについて、関係者で具体的な内容と方策を検討する。

< 参 考 >

令和4年度 協議会の開催日

- 第1回 令和4年 6月 7日 (火)
- 第2回 令和4年 7月 14日 (木)
- 第3回 令和4年 8月 31日 (水)
- 第4回 令和4年 11月 8日 (火)
- 第5回 令和4年 12月 13日 (火)
- 第6回 令和5年 2月 7日 (火)

東紀州地域 中学校卒業生数の推移と予測（含社会増減）

令和4年5月1日 教育政策課調べ

	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 卒業	R 5.3 現中3	R 6.3 現中2	R 7.3 現中1	R 8.3 現小6	R 9.3 現小5	R 10.3 現小4	R 11.3 現小3	R 12.3 現小2	R 13.3 現小1
尾鷲市	卒業生数	122	118	130	127	119	107	99	120	87	84	68	87
	前年度対比		-4	12	-3	-6	-12	-8	21	-33	-3	-16	19
	R4.3対比					-6	-20	-28	-7	-40	-43	-59	-40
北牟婁郡	卒業生数	115	110	112	121	93	75	94	79	68	79	70	62
	前年度対比		-5	2	9	-6	-18	19	-15	-11	11	-9	-8
	R4.3対比					-22	-46	-27	-42	-53	-42	-51	-59
小計	卒業生数	237	228	242	248	220	182	193	199	155	163	138	149
	前年度対比		-9	14	6	-8	-30	11	6	-44	8	-25	11
	R4.3対比					-28	-66	-55	-49	-93	-85	-110	-99
熊野市	卒業生数	132	113	117	119	100	96	101	104	104	123	98	98
	前年度対比		-19	4	2	-19	-13	5	3	0	19	-25	0
	R4.3対比					-19	-23	-18	-15	-15	4	-21	-21
南牟婁郡	卒業生数	172	143	157	149	161	135	140	127	136	137	102	150
	前年度対比		-29	14	-8	12	-7	5	-13	9	1	-35	48
	R4.3対比					12	-14	-9	-22	-13	-12	-47	1
小計	卒業生数	304	256	274	268	261	231	241	231	240	260	200	248
	前年度対比		-48	18	-6	-7	-32	10	-10	9	20	-60	48
	R4.3対比					-7	-37	-27	-37	-28	-8	-68	-20
東紀州合計	卒業生数	541	484	516	516	481	413	434	430	395	423	338	397
	前年度対比		-57	32	0	-35	-62	21	-4	-35	28	-85	59
	R4.3対比					-35	-103	-82	-86	-121	-93	-178	-119

《参考》

木本高校	募集定員	200	160	160	160	160
	欠員	0	2	0	1	-
紀南高校	募集定員	80	80	80	80	80
	欠員	18	23	8	0	-
学級数	木本・紀南	5・2	4・2	4・2	4・2	4・2

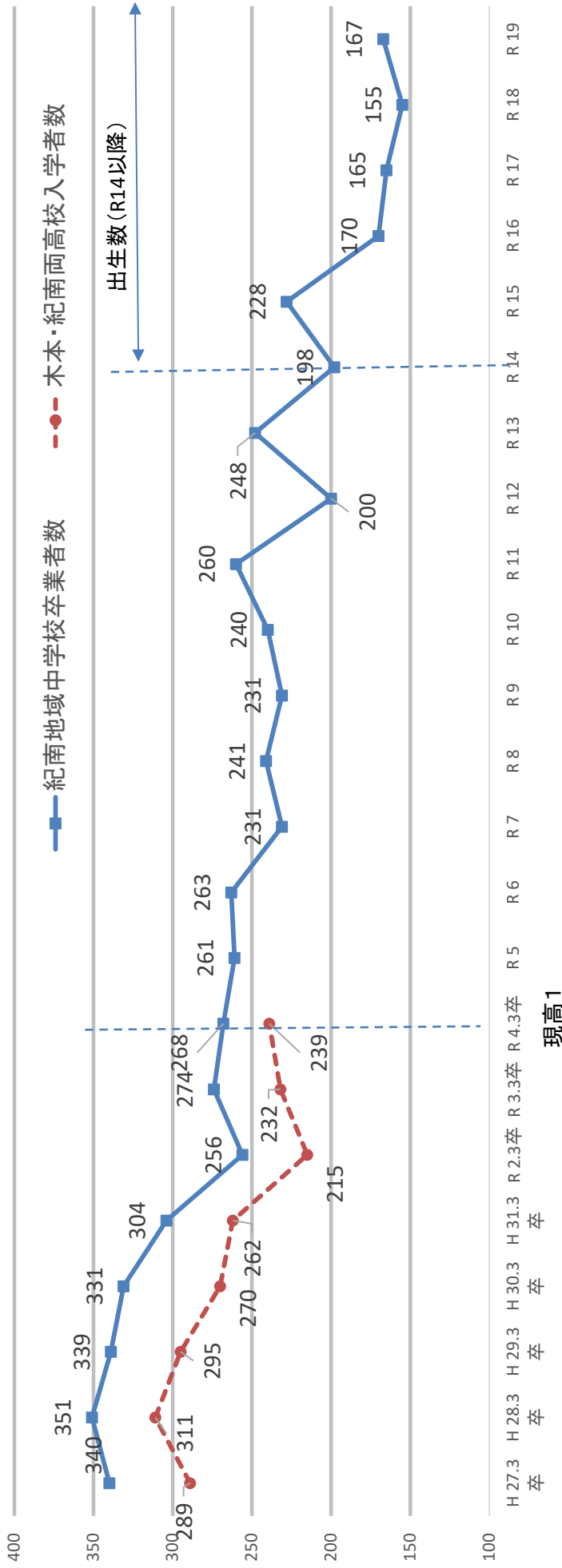
紀南地域の
入学定員の推移予測

R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度	R 9年度	R 10年度	R 11年度	R 12年度	R 13年度
6学級	6学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	6学級程度	4学級程度	5学級程度

参考資料 1

熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数(予測)と木本・紀南両高等学校への入学者数

※R14年度以降は地域の出生数を記載



熊野市・南牟婁郡の出生数

	H27年度出生 現小1	H28年度出生 5～6才	H29年度出生 4～5才	H30年度出生 3～4才	R元年度出生 2～3才	R2年度出生 1～2才	R3年度出生 0～1才
熊野市	99	73	108	60	87	82	68
御浜町	52	42	45	39	25	20	38
紀宝町	102	83	75	71	53	53	61
合計	253	198	228	170	165	155	167

参考資料2

※ 木本・紀南両高等学校への入学者人数は、熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数と比較すると、地域外へ進学する生徒や就職する生徒等が一定存在することから、毎年40人～50人少ない状況です。この状況のまま推移すると、両校への入学者数は令和7年度には5学級規模、令和12年度には4学級規模となるが見込まれます。

令和4年度 紀南地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿

No		所属及び名前
1	学識経験者	三重大学教育学部 教授 平山 大輔
2	地域有識者	熊野商工会議所 青年部幹事 森本 健一
3		文恵丸水産 代表 長山 行文
4		紀宝町商工会 会長 田尾 友児
5	市町教育委員会	熊野市教育委員会 教育長 倉本 勝也
6		御浜町教育委員会 教育長 辻本 誠一
7		紀宝町教育委員会 教育長 西 章
8	小中学校PTA代表	紀南PTA連合会 会長 (第2回まで) 高垣 裕人 (第3回から) 野地本 隆
9		紀南PTA連合会 進路研究委員長 倉本 崇弘
10	高等学校PTA代表	県立木本高等学校PTA 会長 道前 涼太
11		県立紀南高等学校PTA 会長 中嶋 悦雄
12	同窓会・地域代表	県立木本高等学校同窓会 会長 森岡 忠雄
13		県立紀南高等学校学校運営協議会 会長 廣畑 勝也
14	小中学校長代表	熊野市立木本小学校 校長 川崎 奈保美
15		御浜町立尾呂志学園中学校 校長 高田 有治
16	小中学校教員代表	熊野市立金山小学校 教諭 久保 範顕
17		御浜町立御浜中学校 教諭 大崎 重久
18	県立高等学校長	県立木本高等学校 校長 松本 徳一
19		県立紀南高等学校 校長 堀越 英範
20	県立高等学校教員代表	県立木本高等学校 教諭 寺前 淑湖